

がぶくしょ

本書は、農水省の論客でありこのほど農業総合研究所の所長に就任した篠原孝氏が、雑誌等に執筆したものを再編集したものである。著者の個人的体験が多く書かれており、農業を環境、循環という視点から多面的に論じている。

篠原氏は、石橋湛山が戦前の日本の帝国主義的膨張主義(軍事大国主義)を批判し、「小日本主義」を唱えたことにヒントを得て、一九八〇年代半ばに「農的小日本主義」を提唱した。当時の日本は「経済大国」「ジャパン・アズ・ナンバー1」と浮かれており、財界による農政批判が吹き荒れた時代であった。日本の農政も農業基本法以降の農業近代化路線に沿って規模拡大、低コスト化を追求しており、こうした中では「農的小日本主義」の主張は異端として見られていた。

しかし、バブル経済の崩壊や地球環境問題の出現により時代は大きく転換する。新農業基本法では農業の自然循環機能の発揮が掲げられ、本年五月には「循環型社会形成推進基本法」が制定された。篠原氏の主張がようやく政策の主流になりつつあると

いえよう。

本書の各章を簡単に紹介すると、第一章「食料小国」の貿易依存と自給」では、自由貿易の歴史を海洋自由の原則との関係で論じ、イギリスの穀物法論争と日本の農産物貿易自由化論争との比較を行なっており、広い視野から食料輸入大国日本の弱みと歪みを指摘している。第二章「環境保全型農業への潮流」では、環境にシフトしはじめた欧米の農業の潮流を紹介し、環境保全型農業こそ日本農業の進むべき道であると主張している。なお、「環境保全型農業」とい

「農的循環社会への道」

篠原 孝著(創森社)

う言葉は「有機農業」に代わって現在日本で広く使われているが、篠原氏が一九八二年に著書『飽食のかげの星条旗』の中で、資源収奪型農業に対する意味で使ったのが最初であると紹介している。第三章「農山漁村の原風景と可能性」では、自らの体験を語りながら、高齢者問題、環境問題の深刻化のなかで、農村地域社会こそが日本の進むべき途を示していると主張している。第四章「ヨーロッパ農村の包容力」では、OECD代表部に勤務した時のフランスでの経験を主に書いており、ワイン、ブロー

二ユの森、農家民宿、グリーンツーリズム等、欧州の農村の魅力を語っている。看板だらけの日本の農村風景と異なっており、農村が美しいのは、こうした景観を維持しようとする意識的努力があったためであると指摘している。第五章「農的循環社会への道」では、二一世紀の世界の課題は、環境、人口、食料・エネルギーであり、これらはいずれも農業と密接に関わってくる問題であるとし、また、現代日本の課題である「ゴミ問題、過疎・過密、高齢社会、地域社会の崩壊」の解決のためにも農業・農村が不可欠であるとし、「工的大日本」から「農的・環的日本」への転換が必要であると主張している。

以上が本書の内容であるが、問題はこうした社会を構築するため今後日本で具体的にどうするかであろう。農業政策に関して言えば、新基本法はできたものの、基本法だけでは駄目であり、農業財政の再編、環境に配慮した土地利用計画の再構築、土地改良事業の見直し、有機農業への支援等が必要であろう。こうした具体的な政策なしに「農的循環社会」は実現できず、その点からも欧州からまだ学ぶべきことは多いと思われる。

(二〇〇〇年八月、三三三頁、二、〇〇〇円)

(清水徹朗)